第２号

黒田大明神原Ｂ遺跡　通信

2021 年 11 月２日発行

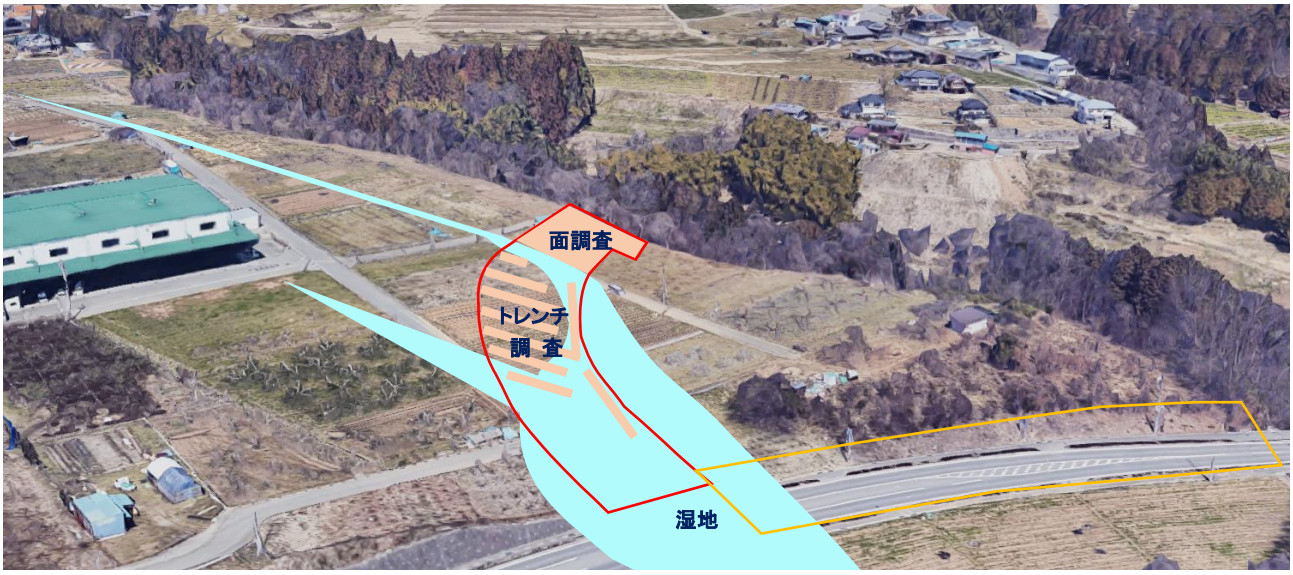
◆集落の範囲を探る

９月から 10 月初旬にかけて、県道 15 号線（通称フルーツライン）から南信州いいだ果実選果場へ向かう市道北側の畑地で、トレンチ[1]を９本掘りました。トレンチ調査の範囲では、耕作土から打製石斧(だせいせきふ)が出土した以外、遺構や遺物[2]は発見できませんでした。トレンチの断面で土の堆積や傾斜を見ると、一帯には、西から東へ向かう谷が埋没していたようです。この谷は、飯田市教育委員会の第一次調査で確認された「湿地」に向かっています。選果場建設前の試掘調査を担当した方によると、選果場の北半分にも、遺構はなかったようです。

現状は、日当たりの良いゆるやかな傾斜地で、古代人が好んで住まいをつくりそうな場所ですが、以前は、湿地に向かう北東向きの傾斜地だったため、古代人はもっと良い場所を選んだのかもしれません。

地形の傾斜方向にトレンチを掘る（北東から撮影）

トレンチの断面をていねいに削る（西から撮影）



水色は埋没谷（推定）　赤線は調査範囲　黄線は飯田市教委第一次調査範囲（Google 写真を編集　南東から撮影）

1 トレンチとは、発掘用に設けた細長い溝（上の写真で薄茶色の細長い部分）
2 遺構とは、過去の構築物が大地に残った跡（不動産）。遺物とは、過去の人が残した物（動産）。

◆果樹園の下に眠る遺構の見つけ方

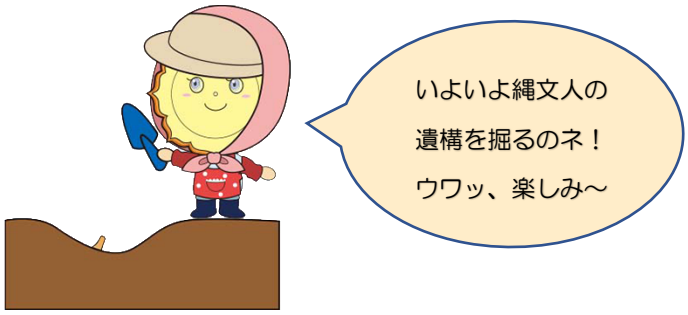
発掘調査で遺構を見つける(検出する)方法は、もともとその場所にあった土(地山)と、土を掘り返して、再び埋まった土(埋土)との違いを見分けることです。今回の調査では、地山の黄色い土の上面を平らに削って、埋土との違いを判別しています。土を掘り返した原因が、自然の影響によるものか、人工的なものか。人工的なものとした場合、それはいつ頃のものかといったことを、埋土の性質や平面・断面の形、埋土の中から出てくる物から判断していきます。

調査範囲の北側、栃ヶ洞(とちがほら)川に面した果樹園一帯を面調査したところ、アメーバ状に広がるもの、細長いもの、不整円形や四角形のものなど、さまざまな形の埋土を確認しています。これら多くの埋土は、黒褐色の締まりのないもので、中からは木の根や、ビニールの切れ端、鉄の棒がついたコンクリートブロックなどが出土しています。農家の皆さんが一所懸命に果物をつくっていた跡が、現代の遺構となったものと考えられます。

ところが、これと異なる褐色の締まりのある埋土からは、縄文土器の破片や石鏃(せきぞく)、打製石斧、黒曜石の破片などが出土していて、縄文時代の遺構の可能性が考えられます。また、その他に弥生土器の破片が見つかった四角い遺構もあります。10 月末現在、こうした場所が面調査の範囲から５か所程度見つかっています。

今月からは、いよいよ縄文時代や弥生時代の人びとの暮らしの跡を探っていくことになります。

黒線内の褐色の埋土に、黒褐色の埋土が入り込む。白丸は縄文時代の遺物出土場所



長野県埋蔵文化財センター飯田支所
発掘現場担当：平林　彰/鈴木時夫
現場携帯電話：080-1320-0216
埋文公式ホームページ：
http://naganomaibun.or.jp